
心理療法が始まるまで

(9)

—コミュニティと病院で—

藤 信子

先日ある論文を読んでいて1つのパラグラフの中に、occupation, work, employment と出てきた (Martin-Baro 1994) ので job も加え、これはどのように訳すかと大学院生との話しになった。この論文 (エルサルヴァドルの内戦下における精神保健の問題) の文脈の中では順に、occupation は「職業、職」、work は「仕事、働き口」、employment は「雇用」、job は「仕事、賃仕事、役目、職務」かな・・・としながら、ではジョブ・コーチは職業訓練をしているわけではなく、職場のある仕事における役目を果たすことを援助している、

などと話していた。そこで思ったのは occupational therapist は作業療法士という日本語だけれど、どうして職業療法士ではないのだろう、と思った。今度知り合いの OT (作業療法士) にあつたら聞いてみようと思う。これはこの論文だけでなく、work という単語が論文中に出てきた時に、仕事、労働、作業、任務、成果、研究、課題、職業、勤め、(ジーニアス英和大事典にはまだ作品、著作・・・と多くあるが) などからどの語がその文脈に適切かと、考えることが私の場合よくあるからだ。

この頃精神科の治療で、うつ病リワーク

(復職支援)ということをよく聞くようになった。横山ら(2010)によると、そのプログラムは治療目標として「再休職予防」をあげ、スポーツ、レクリエーション、職場場면을再現するような様々なプログラム、心理教育、集団認知行動療法などが実施されているという。Martin-Baro(1994)は、仕事は人間のパーソナリティの発達にとって基本的な根源であり、アイデンティティを形成する場合に最も関係する過程であり、人間にとっての実現や失敗の基本的な文脈だ、と言っている。これは内戦という状況で仕事がなく、毎日仕事を捜していることについて指摘しているからこそ、このように根源的なことばが出てくるのだが、今更ながら、仕事や職業、雇用などについて考えさせられた。そのような観点から考えると、リワークが単に身体の調子を復帰のために整えたり、作業や課題の遂行や達成度を見ることだけが主ではなく、対人関係などに焦点をあてる必要もでてくるのだろう。ただし、対人関係への洞察を求める心理療法は、復職という目標のプログラムに入れる時には、期間のある中でどのような目標を立てるのか、治療者とクライアントがどのように理解しているのか、個人の状況に合わせて治療を組み立てるのは、簡単なことではないだろう、と思う。

仕事、職業、雇用などについて身近な話

題を見ていくと、研究科での大学院生たちの研究テーマが浮かんでくる。先ほどのジョブ・コーチもそうだけれど、企業の「障害者雇用」についての研究もある。そしてこの障害者雇用というテーマを先ほどからの仕事と発達・アイデンティティ形成などの文脈から考えると、誰の問題なのかということが出てくる。「障害者雇用」というのは、雇用する企業側のことばで、雇われる人のことばではないだろう。このことばの背景には、法定雇用率ことがあるように、少なくとも聞く側の私は感じる。具体的な誰かについて、その雇用形態をどのように呼ぶのかは、その会社にとってその人が入社し一緒に働くことを、どのように考えるのかということに関わるのではないだろうか。そのように考える時、雇う会社としては、法的な名称などから離れ、自分の会社で何をしたいのかを考えてみることは、大事なことのように私には思える。事業や企画の名称は記号のようでも、やはり意味を託しているのだから、自分の会社はこうしたい、という気持ちを伝えるものを考えたらいいように思う。「障害者雇用」を「挑戦する能力のある人」「挑戦するチャンスを持っている人」「挑戦という使命、課題、チャンスを与えられた人」という意味で、「チャレンジド雇用」という名称変更した会社があるという(今野ら、2006)。このチャレンジドということばから、私は障がい児・者

の **challenged behavior** という用語を思い出した。「問題行動」をそのように呼ぶようになったのは、障がい児・者の行動が問題であるように見えるが、一緒にいる人が環境・対応を変えるように、という意味で **challenge** なのだという考え方である。この意味は大事にしたいと思っている。S 社は「一緒に働く喜びを持つ仲間」という意識を共有できていたからこそ名称を変更し、それはやはり会社の皆にとって **challenge** という意味があったのではないか。たかが企画、プログラムなどの名称で貴重な時間を使いたくないと思う人も、この効率化を優先する社会ではいると思う。会社の理念、目標があるのでそれに合わせて、仕事をしてください、ということなのだろうか。全てがそこで決まることではないだろう。日常の現場でどのように考えるかという周りの人と話すことから始まるのかもしれない。名称、ことばをあまり侮らないほうがいいと思う。ことばの問題は思考に行き着く。どう呼ぶかを大切にすることは、自分の考えを大事に暖めることだと思う。

—文献—

今野義孝・霜田浩信 (2006) 知的障害者の就労支援に関する研究—S 社の「チャレンジド雇用」. 『人間科学研究』文教大学人間科学部、第 28 号、69—78、

Martin-Baro, I. (tr.) Wallace, A. (1994) War and Mental Health. Aron & Corne (ed.) *Writings for a Liberation Psychology*. 108-121

横山太範・田中理香・北西憲二 (2010) うつ病リワーク (復職支援) プログラムの集団精神療法的検討— (2) 再休職予防を中心に—. 集団精神療法 26 (2) 134—139